榧木覺書

榧木覺書

かやのきおぼえがき

草野比佐男

光和堂

著者略歴

草野比佐男（くさのひさお）
一九二七年福島県いわき市に生まれる。
〈日通文学〉〈中部文学〉に拠る。
著書・詩集《村の女は眠れない》（たいまつ社）その他。

樅木覚書《かやのきおぼえがき》

●一九七二年七月一〇日　印刷
一九七二年七月十五日　発行

草野比佐男　著
草鹿直太郎　発行
第二製版印刷
定価六五〇円　〒一一〇

東京都豊島区西巣鴨一―一五―四　光和堂
振替番号　東京六八四一四番　電話(918)四二六八番

© H. KUSANO　1972
(分) 0093 (製) 0028 (出) 2304

榧木覚書／目次

白い石　3
ふたつの夏　47
鴫はさやらず　105
津軽から来た男　189
残された者ら　231

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

白

い

石

ウグイが瀬につく頃は深いところでも腰きりだった水がトモの顎の下でごぼごぼと鳴った。色を薄めたココアのように濁っていた。そのことにしかし、べつに不満はない。大川の荒々しい変化はいっそう泳ぎに張合をもたらすというものだ。梅雨空が長くぐずついた今年はまだ、おとといが水に入ったはじめてだが、一年前のたどたどしい泳ぎぶりに比較すればトモの手足は自分でも感心するぐらい自由自在に水を捌く。すっかり自信がついた。不満は、そんなにも熟練した自分の泳ぎを見てくれる友達がいないことだった。一日目はカンジが来ていたが、昨日からがいけなかった。泳ぎのおもしろさがいつのまにかむなしさに押しのけられてい、気がついてみると手足の動きをとめて、仰向けに泛かんで下流へながされているのだった。もともと泳ぎの醍醐味は多勢の仲間と旺んなしぶきを立てあうところにあるようだった。おととしあたりまでは、いや去年までは、この大川に集まってくるトモと年齢がおなじかいくらも違わない少年がかなりいた。ところがここすこしのあいだに慌しく街へ去ってしまって、いまはたとえば小学校の、たった九

人で構成される五年生のトモのクラスへ榧ノ木から通うのはカンジを残すだけになった。

そのカンジをトモは昨日もあてにしていたが、誘いに行くとかれの祖母が出て来て、泳ぎたきやよその孫は連れずに一人で行け、それなら溺れたっててめえの勝手だ、いかにもにくにくしげなどなりかただった。なぜそんなあしらいをうけるのかわからず、大いに不服だったが、皺の中から剝きだされた猛禽のような、黄味を帯びた眼のおそろしさにうしろも見ずに遁げだした。しかたなく一人で泳いで夕方になって帰ると、今度は母親の待ち構えていたような叱言を浴びた。みろ、カンジは街の眼医者に連れていかれたっていうど。眼が両方とも真っ赤に腫れて一晩中唸ってたが、それってのもおととい雨があがるとすぐ濁った川へ連れだしたおめえのせいだとあそこのばあちゃんが押し込んで来た。親たちの出稼ぎ中にかたわにでもしたら、オラ首でもくくるしかねえって。でも、オレはなんともねえど、泳ぎとは関係ねえとトモが自分の眼を示して言うと、おめえみてえなロクデナシと出来がちがうわ、おめえなんかゴミ溜めから拾って食っても腹もこわさめえ、と母親はいっそう癇癪を起こして痩せこけた頬をふるわせた。ちがうったら、あいつがキューピーマヨネーズだからだ、とトモはおもしろくなかった。細いからだに不釣合に頭が大きく眼が大きいカンジは普段から丈夫でなく、すこしのことですぐにどこかをわるくするのだった。だいたい、大事にされすぎらあ。夫婦で出稼ぎしているあいつのとうちゃんとかあちゃんはしっきりなしに金だのおもちゃだのを送ってよこして、プラモデルは部屋中にころがってい

るし、この前は一万円札でチョコレートを買ってた。ばあちゃんはまたばあちゃんで赤んぼをあつかうようにつきっきりで、カンジのやつバカみてえに涙までかんでもらうんだ。あれじゃ強くなんかなれるわけはねえ。なんだ、そのふてくされた態度、と母親が言った。カンジがキューピーマヨネーズならおめえは……。適当なたとえを捜して口ごもった時、どうしたんだあ、奥の間から中風で臥たきりの祖父の呂律の回らない声がした。外界と遮断されていると好奇心だけが異常に旺盛になるのだろう、どんなことでも訊きたがった。じいちゃんには関係のねえこと！　母親はトモには理解しにくいにくしみといらだちをこめて一喝し、とにかくよそのこどもは汗だくで葉タバコを手伝ったりしてるのに、晴れたと思うと水につかりっきりで、その上よそから尻まで持ちこまれて……うちにだってその気なら仕事はなんぼでもあっぺ、庭を掃いたり雑巾を掛けたり……いいか、あしたから毎日働け、川さなんか突っぱしったらただでおかねから。

しかし、叱言もトモにはききめはなかった。朝のうちは殊勝さをよそおっていたが、雑巾がけが終わると、玄関から表の方へ母親の眼の届かないところまで掃いていき、箒を生垣の根方に押しこんでこっそりと遁げだしてしまったのだ。

田圃の細い畦を渉って堤防の道へ急いだ。畦の両側の田圃の稲はここ二、三日の強烈な日ざしに遇って水気をなくした葉を力なく垂らし、乾草小屋の中とおなじにおいを立ちのぼらせていた。それと対照的な逞しさを誇っているのは稲作をやめた田圃にむらがり生えた青萱や葦だっ

た。長い梅雨のあいだにも休まず伸びて草丈は稲の三倍にも達し、いかにも勁く硬そうな緑の葉尖が眩しい空を蔽うように繁りあっていた。遠からず四方の畦を侵して拡がり、見えるかぎりの田圃を自分たちの領土にしてみせるとふてぶてしく宣言している様子であった。トモは畦を渉りながらズックの足で青萱の根もとを蹴りつけた。ざわざわと音がし、葉末に休んでいた蜻蛉が高くあがって透明な翅をきらめかせた。これはヨシミんとこの田圃だった、ヨシミはどうしてっぺ、とトモは考えながら歩いた。トモと同級生で、街へ移ってからも、学校が変わるのがいやだと言って半年ほど頑張ったバス通学も結局はつづかなかったが、カンジなどとはちがってトモそこのけの腕白者だった。あいつがいたら梶ノ木ももっとおもしろかったっぺ。トモはヨシミのいつも頬や鼻の下を汚していた顔を思いうかべ、するとほとんど同時にその顔の右にも左にも遊び仲間のそれぞれに個性的な顔が現われてなつかしさに胸を絞めつけられた。以前は夏になると、それらの顔が大川に溢れひしめき、笑いあい罵りあって水をしぶかせたものだった。彼らの行先は、ヨシミのようにすぐ近くの街へ移った者もいたし、遠い県外へ移った者もいてまちまちだったが、トモにはここを出ていった全部が一個所に集まって毎日賑やかに遊んでいるように思えた。実際にはあり得ないその光景がありありと見えて、トモの胸にやりきれない孤りの思いがひろがった。トモはいいよ、とうちゃんもかあちゃんも家にいて、と大人のだれかに言われたことがあった。それってのもトモのとうちゃんは先が読めてたんだな、早くから街さ商売をみつけて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たからいまになってバタバタしねえで済む。たしかに父親は若い頃から街の運送会社で働いていて、二十五キロのバイク通勤で朝は早く夜は遅いが、とにかく家にいる。トモに言わせればしかし、そのために仲間から置きざりをくらった気持ちが強いし、たとえ同じ置きざりにしてもカンジの方がましだと思わないわけにはいかない。ばあちゃんにちやほやされながら、プラモデル、一万円札……。それに較べてトモの母親ときたら、まったくのしみったれで、家族中で土方働きをしてるよその真似はできねえとプロレス雑誌の『ゴング』一冊買ってくれない。母親と一緒に暮らすことでなにかがあるとすればそれはどなりつけられることだろう。そのヒステリーは常軌をはずれていて、トモは、オレはどなられるために生まれてきたみてえだとやりきれない時がある。今日もまたまぬがれまいとトモは顔いっぱいに口を開閉させる母親のすさまじさを思い描き、なれっこになっているとはいえすこしおびえたが、はずみをつけて堤防の傾斜を駈けあがることでその感情をふり払った。堤防の上はそれがそのままトラック幅の道になっていて、そこに立つと磧の向こうになめらかに膨れあがる大川が見えた。トモは歩きながらランニングシャツを脱いでまるめ、半ズボンのベルトをゆるめた。大きなクルミの木が磧に日蔭を作っているところへ堤防からおりた。立ったまま腰をゆすってズボンを足もとに脱ぎおとし、位置もきめずにシャツをほうりなげて、水に向かって走った。

ひとしきり泳ぐとしかし、トモは昨日もかれを何度も下流へ押しながしたむなしさの虜になっ

た。そのむなしさが昨日よりもさからいがたい力をもつのは、からだが水に狎れて新鮮な感動を薄めるせいかもしれないし、ますます身につけた泳ぎの自信が逆に感興をうしなわせるためかもしれなかったが、なんといっても一番の理由はかれが一人ぼっちだという点に求められるようだった。仲間と騒ぎあうことが自分の存在確認に必要な年齢だった。

トモは先程から泳ぎをやめて、顎のすぐ下でごぼごぼと鳴る水音につつまれていた。眼をなんとなくココアを薄めたような水面がある部分は強烈に反射する流れのさきの磧へ向けて、足はほとんど無意識にたえず踏みかえていた。烈しい流れが足裏の砂や小石を浚うのでそうしないとからだが均衡をうしなうのだった。そこから眺める磧には例のクルミの大木以外木の影はなく、石まじりの砂地一帯に疎らな葦や黄いろの花をつけた月見草が生え、ところどころには空から撒かれたようなつゆくさの小花が藍色に光っていた。仔犬一匹通らない堤防を抽んじて何個所か輝きに満ちた葉のむらがりが見えるのは稲作を放棄した田圃の青萱や葦で、堤防よりかなり低い田圃のそれがこちら側からも望めるということはその凶暴なまでの生命力を示すものだった。

トモはようやく家に帰る決心をつけた。いつまで水の中にいてもだれが来るわけでもないし、いまならまだ帰って箒を持てば母親の眼をごまかせるかもしれなかった。トモは川床を蹴ってか

らだをうかし、岸をめざすクロールの形になった。水からあがって、シャツとズボンを残してあるクルミの木の方へ歩きだした。磧は砂も砂から覗く石も熱く灼けていて、トモを爪先だけで歩く忍び足の恰好にさせた。トモの眼の隅でちらりとなにかが動いたようだった。思わず足をとめると、クルミの木の蔭の葦のあたりでまたもやひそやかな気配がして、イタチかもしれないと咄嗟の感が働いた。樋ノ木では人間がすくなくなるにつれていたるところでイタチを見かけるようになっていた。イタチは人間に遇ってもすぐには遁げず、首を回してバカにした表情でこちらを見、すこし行ってはまた立ちどまってそのしぐさをくりかえした。容易に捕えられそうなのだが、躍りかかろうとすると相手の心を読んだすばやさで、するりと道端のボサや休耕田のくさむらに隠れてしまう。運動神経を自負するトモにはまったくいまいましい小動物だった。トモはさらに何歩か爪先だちで近づき、いきなり猛烈な勢いで気配に向かって突進した。次の瞬間、思いもかけないけたたましい悲鳴にトモは迎えられた。

生まれた時のままの恰好をしたエミが大きくみひらいた眼を襲撃者にあてて砂地にしゃがみこんでいた。泳いだあとのからだを拭いていたらしく、タオルを足もとに落とし、濡れた背中を能うかぎり収縮させる努力を見せて両の掌はしっかりと胸をかばっていた。もう一度エミは悲鳴を迸らせた。愕いたのはエミよりもトモの方かもしれなかった。からだを回して走り去る知恵もうかばず、半分ほど開いた口を顫わせながら、エミを見ていた。

エミが踵で砂を擦ってじりじりとあとじさりをはじめ、みひらいた眼はしかし依然としてトモから離さないのだった。トモはいたずらに突っ立ってうろたえがもたらした意味のない笑いを頬にうかべ、なにか言わねばならない、早く言わねばならない、という考えにせきたてられていた。ようやく声が出て、ひとりごとのように言った。オレ、泳いでんのはオレだけだと思った。カンジは眼をわるくして……うん、水が濁ってるものな……。だが、エミはなおもあとじさりをしながら鋭くトモの言葉を断ちきった。知らね！　知らね！　ねえちゃんに言っちまう、ほんとに言っちまう、一緒に来てあそこにいるんだから……。自分よりもずっと大人だと考えていた一級上のエミだったが、その言い方にはひどく幼い感じがあった。エミがあまりにも強調するのでトモはそのあたりを見たが、磧の眺めは遠くまで焚火の炎に接した空間のようにくらくらと揺れているだけで人が来ている様子はなかった。磧から眼を戻したトモにエミはまた声を張りあげた。言っちまう！　言っちまう！　トモは突然ひどく腹を立てた。ひょっとするとこの場をどう収めたらいいかわからないいらだたしさもまじっていたかもしれないが、とにかくからだの顫えがとまらないほどの粗暴な感情に衝き動かされて、文句ならこっちの方があらあ、んだとも、迷惑してんのはオレの方だっぺ、たまがしてわるいたって、故意でなかったし、たまげたというならこっちだっておめえ以上だど、とさまざまな主張を胸の中に渦巻かせながら、なんで？　なんで言うんだ？　脣をつきだして一歩前に出た。エミが跳ねるようにうしろへさがって、やだ！　ねえちゃ

あん！……と援けを呼んだ。トモはいらだって地団駄を踏み、んだからよ、オレがなにしたっていうんだ？　また一歩近づいた。エミは眼に宿していた不可解ではげしいおびえを体中に行きわたらせて、ねえちゃあん、ねえちゃあん……といっそう騒ぎたてた。おもしろくねえ、おもしろくねえ……。身におぼえのない不当な侮辱を浴びている実感がトモの頭にますます熱い血をのぼらせた。エミがす示はげしい嫌悪にはげしく挑発されるふうで、思いきり残虐な行動に出ないかぎり鎮まりそうにない昂奮があった。くそっ！　トモは跳躍して一挙にエミとの距離を縮め、エミの肩を突きとばした。ねえちゃあん！　それしか言葉がないようにエミが甲高く姉を呼んだ。エミが叫べば叫ぶほどトモは猛りたって、うずくまるエミを脚のあいだに挟んで立ち、摑んだ髪の毛をひっぱってヒイヒイ言わせた。脚をひらいて強く引き、耐えきれずに砂地にころがって蝦のようにまるくなろうとするからだをむりやりに仰向けにして跨った。そのあいだにもずっと姉を呼びつづけてエミの声は細く嗄れたが、自由な両足はなおも砂を蹴ってトモをはねかえそうと動いた。だが、そのような窮地の中でもなお胸から離そうとしない掌は抵抗力を著しく削いでいて、なにほどの効果もなかった。いきむように臀に力を集めて相手の動きを妨げ、胸を守る掌を引き剝がそうとトモが思いついたのは、それがエミを徹底的に痛めつける一番のやり口だと察したためだった。案の定エミはこれほどの力がまだ残っていたのかと愕かせる勢いでトモに手向かった。眼をつりあげ歯をくいしばって、いつもの円い頬にえくぼを彫ったエミの印象とはまるで

違う必死のおももちにトモはたじろいだが、ここで中止したらいっそうバカにされるだろうという気持ちがそのたじろぎを圧しつぶした。荒い息遣いを交えながら二人はかなりの時間を争った。エミには大分前から姉を呼ぶ余裕がうしなわれていた。だが、結局は男の子のトモの力がまさって、折り彎げた腕を伸ばさせてからだの両側の砂に押しつけることに成功した。腕にはまだ隙をみて振りほどこうとする力が感じられ、トモはそれからもしばらく油断なく押えつけていたが、やがて、ふと、いつのまにかぐったりと体中の力を脱いでいる相手に気がついた。掴んでいた手首を離してみたが身じろぎ一つしない。いまのいままで壮烈なあらがいを示していたエミを考えると、錯覚はトモの側にある感じだった。まさか、死んだんでは？……あわてて馬乗りになった背をのばしてエミの顔を見た。生きてはいるがへんにひっそりとおだやかな、心の中が読みとれない表情だった。顔から胸へ視線をさげると、トモにはない一対の膨らみが眼についたが、それは完全に育ちきっていず、こどものかれの掌にもすっぽりと収まりそうな大きさだった。なんだ、こんなもの、とトモは不意に心に躍りだした羞恥感をねじふせる必要もあって軽蔑したが、実際には軽蔑しきれないその物自体が秘めたふしぎな牽引力に、オレはやっぱりひどく悪いことをしてしまったんだという思いを深めた。かれはこそこそとエミから降りた。

エミはしかし、トモの重みが除かれても起きあがろうとする意志を見せなかった。しぜんトモには、馬乗りになっていた時には見ないで済んだ脚のつけ根のもりあがりの一部も眼について、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com